

青年期におけるネガティブな反すうが

死の不安とその対処に与える影響

浅本有美* 小川俊樹** 鈴木伸一***

The influence of negative rumination on death anxiety and coping with death anxiety in Japanese youth

Yumi ASAMOTO* Toshiki OGAWA** Shin-ichi SUZUKI***

The purpose of this study was to examine the influence of negative rumination in youth on death anxiety and coping with death anxiety. Subjects were 221 (102 male, 119 female) undergraduate students, who were asked to answer a scaled set of questionnaires about Negative Rumination, Coping with Death Anxiety and Death Anxiety. The result clarified that “Negative Rumination Trait” promoted “Consideration Coping”, and “Consideration Coping” promoted “Death Anxiety”. Moreover, it was indicated that “Uncontrollability of Negative Rumination” promoted “Death Anxiety” directly. In addition, it was revealed that “Body Management Coping” and “Avoidance Coping” promoted “Death Anxiety”, and that “Acceptance Coping” decreased “Death Anxiety”.

Keywords : negative rumination, death anxiety, coping with death anxiety

問題と目的

医療の進歩や核家族化が進み、昔に比べて直接的な死との関わりが減少していると言われる。にもかかわらず、多くの青年が死に対して不安や恐怖などの否定的な感情やイメージを抱いていると指摘されている（藤井，2003；一色・河野，2000）。しかしその一方で、青年が日常生活においてどのくらいの頻度で死の不安を抱いているのかについての実証的な検討は成されていない。

発達的な観点から死の不安を見ると、死の概念は児童期前半までに成立し、死に関する否定的な

*広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)

**筑波大学大学院人間総合科学研究科(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)

***広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター(Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University)

感情反応が増加するが、児童期以降、その感情は成長とともに減少すると言われている(丹下, 2004)。また、18歳から80歳までを対象にした研究においては、死の不安は、加齢や心理社会的成長とともに減少するという報告もある(Rasmussen&Brems, 1996)。しかし中野(1999)は、死の不安は加齢やさまざまな病気と直面することによって次第に増幅され顕在化され、より強い不安となると指摘している。つまり、幼少期は死に対して不安を抱いているにもかかわらず、成長とともにその不安が減少する者もいれば、反対により強い死の不安となり否定的な感情やイメージを抱いてしまう者もいることがわかる。これらの死の不安の個人差を規定する要因の一つとして、死の不安への対処が考えられる。

青年期における死の不安への対処に関して、岡村(1983)は、青年前期は死から目を背けるか無関心かで死の不安・恐怖に対抗する、と指摘している。また、金児(1994)は、青年が死に触れる機会の少なさゆえに、死への対処の仕方を知らず、死についてより不安・恐怖を抱く傾向にあるとしている。このように、青年が死の不安にどのような対処をとるのかについての結果は一貫していない。そして、死の不安への対処を測定する尺度は作成されていない。対象者に青年が含まれている研究の結果では、死の不安と全般性不安との間に高い正の相関が報告されており(Siscoe et al., 1992)、死の不安を増加、または低減するような対処を明らかにすることは、死の不安へよりよく対処していくためにも有益であると考えられる。

ところで伊藤・上里(2001)によれば、ネガティブな事柄は長く考えれば考えるほどうつ状態をもたらすという結果を報告している。これは、ネガティブな反すうと言われている。伊藤・上里(2001)は、ネガティブな反すうを「その人にとって、否定的・嫌悪的な事柄(ネガティブなこと)を長い間、何度も繰り返し考え続けること」と定義し、ネガティブな反すうを測定するネガティブな反すう尺度を作成した。この尺度は、「ネガティブな反すう傾向」、「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の2因子からなり、ネガティブな反すう傾向が臨床レベルの抑うつをもたらす要因であることを明らかにした(伊藤・上里, 2002)。このようなネガティブな反すうに関する知見をふまえると、死について長時間、繰り返し考えるということがあれば、そのことが死の否定的な側面を強調し、死の不安を高めることが推測される。つまり、ネガティブな反すうという個人の特性が死の不安への対処を規定し、用いた対処によって死の不安が増加、または低減すると考えられる。

そこで本研究では、松田(1996)の死の不安の定義を参考に、「青年期における死の不安」を「青年期という死が現前していないときの、いずれは自分にも死が訪れる可能性に対する漠然とした恐れ」と定義し、青年が死の不安を抱く頻度を把握するとともに、死の不安への対処尺度を作成することを目的とする。また、ネガティブな反すうが死の不安への対処、特に熟考するような対処へとつながり、死の不安が高まる、という仮説を設定し、その検証を行うことを目的とする。

予備調査

1. 調査対象者

大学生94名(男性43名、女性51名)を対象とした。平均年齢は 20.47 ± 1.36 歳(19~27歳)であった。

2. 調査内容

① 死の不安尺度

Templer(1970)が作成した Death Anxiety Scale(以下 DAS と略記する)を、松田(1996)が翻訳したものを用了。ただし本研究では、頻度を測定するには適さないと考えられる2項目(「私は人が死について話しているのを聞いても平気である」「私の将来には恐れるものは何もないと感じる」)を削除し、丹下(1999)の死に対する態度尺度の中から、死の不安の高低を反映すると考えられる2項目(「自分が消滅してしまうと思うと恐ろしい」「死後自分の身体に起こることが怖い」)を、文章を修正して加えた合計15項目からなる尺度を用了。また、DASは本来「はい」「いいえ」の2件法で回答する質問紙であるが、より個体差を検出しやすくするためにリッカート法で回答を求めた。回答は、15項目全てに対し、その頻度をそれぞれ5段階評定で記入するように求めた(全くない:1点~よくある:5点)。

② 死の不安を抱くきっかけを尋ねる項目

「青年期という死が現前していないときの、いずれは自分にも死が訪れる可能性に対する漠然とした恐れ」と定義される死の不安とは質的に異なる死の不安を抱いていると考えられる、死に関係する、日常生活ではあまり体験することのない経験(命を脅かす大病、命を脅かす事故・災害、親や兄弟との死別、臨終の場への立会い)を、死の不安を抱くきっかけと考えているかどうかを尋ねる4項目。当てはまる番号全てを丸で囲むように求めた。

③ 自由記述

死の不安への具体的な対処を明らかにし、死の不安への対処尺度を作成するために、「あなたは死に対する考えや感情を不快と感じ、それを解消するために何か考えたり、行動をとったりしましたか。思いつくだけ、自由に書いてください。」という教示で、青年が用いる、死の不安への対処について自由記述で回答を求めた。

3. 結果と考察

① 死の不安を抱く頻度と死の不安を抱くきっかけについて

「命を脅かす事故・災害の経験を死の不安を抱くきっかけと考えている者($t(92)=1.97, p<.10$)」と、「臨終の場への立会いの経験を死の不安を抱くきっかけと考えている者($t(92)=3.22, p<.01$)」は、本研究の青年期における死の不安の定義には当てはまらない者と見え、除外した。それらの者を除く計72名(男性31名、女性41名)について、合計点の平均値を求めたところ 33.60 ± 10.14 であり、男女間の有意差はみられなかった。また、1項目あたりの得点の平均値は2.24であった。尺度全体のCronbachの α 係数を算出したところ.88であった。以上の結果から、現代の青年はそれほど高い頻度ではないにしろ、定期的に死の不安を抱くことがあると考えられる。

② 死の不安への対処尺度について

自由記述から得られた118項目について、KJ法による分類を行った。その結果、「充実」「情報」「感情表出」「熟考」「回避」「気晴らし」「あきらめ」「運命的」「身体管理」「そらし」の10のカテゴリーに分類した。各カテゴリーに含まれる項目について、心理学の教員1名、臨床心理学専攻の大学院生3名によって項目の適切性が確認され、「死の不安への対処尺度(計40項目)」を作成した。

本調査

1. 調査対象者

大学生 268 名（男性 130 名，女性 138 名）であった。しかし，有意に高い死の不安を示した「命を脅かす事故・災害の経験を死の不安を抱くきっかけと考えている者 ($t(266) = 1.93, p < .10$)」と，死の不安が低い傾向を示した「親や兄弟との死別の経験を死の不安を抱くきっかけと考えている者 ($t(266) = -1.67, p < .10$)」，計 47 名を本研究の対象者の定義に沿わない者として除外した。最終的な対象者は 221 名（男性 102 名，女性 119 名）であり，平均年齢は 20.06 ± 1.36 歳（18～26 歳）であった。

2. 調査内容

① ネガティブな反すう尺度

伊藤・上里（2001）により作成された尺度を用いた。この尺度は，ネガティブな反すうをしやすい傾向を指す「ネガティブな反すう傾向」と，ネガティブな反すうをコントロールできないことを指す「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の 2 下位尺度 11 項目からなる。

② 死の不安尺度

予備調査と同一のものを用いた。ただし，本調査ではネガティブな反すうが死の不安の高低にどのように影響しているのかを検討するため，頻度ではなく程度で尋ねた。また，予備調査では除外した，頻度を測定するには適さないと考えられる 2 項目（「私は人が死について話しているのを聞いても平気である」「私の将来には恐れるものは何もないと感じる」）を加えた。合計 17 項目。17 個項目全てに対し，その程度（全く当てはまらない：1 点～非常に当てはまる：5 点）を 5 段階評定で記入するように，リッカート法で回答を求めた。

③ 死の不安を抱くきっかけを尋ねる項目

予備調査と同一のものを用いた。

④ 死の不安への対処尺度

予備調査より作成された，死の不安への対処尺度を用いた。40 項目全てに対し，5 件法（全く当てはまらない：1 点～非常に当てはまる：5 点）で回答を求めた。

結果

1. 死の不安尺度の因子構造

DAS について，松田（1996）は，1 次元性の高い尺度であるとしているが，複数の因子を報告する先行研究もあり（岡村，1983；丹下・坂口，1987），一貫した結果が得られていない。

そこで，DAS の一次元性の確認を行うために因子数を 1 に設定し，先行研究（松田，1996）にならい，因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った。因子負荷量が基準値 .35 に満たない 5 項目を削除し，再度同様の因子分析を行い，1 因子構造が妥当であると判断された。Table1 に，DAS の因子分析結果を示す。また，Cronbach の α 係数を算出したところ，.80 であった。

Table1 DASの因子分析結果

質問項目	因子負荷量	共通性
1 私は死ぬのがとても怖い	.73	.54
5 私は死ぬことを少しも恐れない	.62	.38
6 私はいつか自分が消滅してしまうと思うと恐ろしい	.57	.33
12 私は心臓の発作が本当に怖い	.56	.27
7 私はがんになることを少しも恐れない	.52	.32
4 私は手術を受けなければならないことを考えると恐ろしい	.51	.26
8 死について考えることは私を悩ませない	.51	.26
10 私は苦しみながら死ぬのが恐ろしい	.42	.18
15 私は死体を見るとぞっとする	.40	.16
9 時間がとても速く過ぎ去っていくことに、私はしばしば心を痛めることがある	.38	.14
17 私は死後自分の体に起こることが怖いと感じる	.37	.14
13 人生はなんと短いのだろうと私はしばしば考える	.36	.13
	寄与率 (%)	25.76

2. 死の不安への対処尺度の因子構造

予備調査において作成された死の不安への対処尺度の因子構造を検討するために、因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。因子負荷量が基準値.35に満たない8項目と、複数の項目に高い負荷を示した6項目を削除した。再度同様の因子分析を行い、因子6と因子7の間の減衰率に落差が認められたため、因子の解釈可能性も考慮して因子数は6因子とした。

第1因子に負荷が高かった項目は、「満足できる生き方をしようとした」「生きている今を充実させるようにした」など計4項目であり、人生を充実させ、後悔しないような生き方をしようとしていると考えられ、「充実」と命名した。第2因子に負荷が高かった項目は、「死についてたくさん考えた」「死について何か情報を得ようとした」など計6項目であり、死について情報を得て、自分なりに考えて解釈しようとしていると考えられ、「熟考」と命名した。第3因子に負荷が高かった項目は、「大きな病気や事故を避けるようにしようと思った」「食生活に気をつけようとした」など計4項目であり、命を大事にし、健康に気をつけたり事故にあわないように注意したりしていると考えられ、「身体管理」と命名した。第4因子に負荷が高かった項目は、「死ぬことはしかたがないとあきらめようと思った」「死を運命として受け入れようと考えた」など計5項目であり、死を誰にでも訪れる普遍的なものとして受け入れようとしていると考えられ、「受け入れ」と命名した。第5因子に負荷が高かった項目は、「人に自分の気持ちを話して落ち着こうとした」「誰かに自分の気持ちを話した」など計4項目であり、自分の気持ちを人と話すことによって不安な感情を表出しようとしていると考えられ、「感情表出」と命名した。第6因子に負荷が高かった項目は、「ひたすら忘れようとした」「死について考えないようにした」などの計3項目であり、死の不安を抱くことを避けようとしていると考えられ、「回避」と命名した。

各因子についてCronbachの α 係数を算出したところ、第1因子から順に、.91、.80、.87、.74、.78、.72であった。Table2に死の不安への対処尺度の因子分析結果を示す。

Table2 死の不安への対処尺度の因子分析結果

質問項目	因子負荷量					
	I	II	III	IV	V	VI
因子I 充実 ($\alpha=.91$)						
31 満足できる生き方をしようとした	.85	-.01	.05	-.01	.00	.04
21 生きている今を充実させるようにした	.85	-.07	.09	-.04	-.02	.12
11 一生懸命生きようとした	.80	.07	.04	.02	.04	.01
1 後悔しないように生きようとした	.79	.02	-.04	-.04	.04	.05
因子II 熟考 ($\alpha=.80$)						
14 死についてたくさん考えた	.00	.73	-.03	-.08	.07	-.11
22 死について何か情報を得ようとした	-.06	.68	.12	.08	-.05	-.01
4 死について自分なりの答えを見つけようとした	.23	.66	-.15	.06	-.01	-.04
24 どんなに自分が死の不安を感じているか考えた	-.16	.61	.21	-.02	-.07	.25
2 死に関する本を読んだ	.05	.57	-.05	.00	.01	-.08
34 不安と闘いながら死について考えた	-.13	.55	-.04	-.09	.07	.27
因子III 身体管理 ($\alpha=.87$)						
39 大きな病気や事故を避けるようにしようと思った	-.04	.07	.88	.02	-.05	-.07
19 食生活に気をつけようとした	.07	-.07	.79	-.02	.05	-.08
29 交通事故にあわないように気をつけようとした	.00	-.01	.79	.02	.04	-.11
9 健康に気をつけて生活しようとした	.14	.02	.70	.02	-.06	.08
因子IV 受け入れ ($\alpha=.74$)						
37 死ぬことはしかたがないとあきらめようと思った	-.13	-.10	.08	.72	.07	.10
8 死を運命として受け入れようと考えた	.07	.26	-.07	.68	-.04	-.08
7 死ぬことは避けられないとあきらめようとした	-.05	-.07	-.06	.67	.07	.23
27 気にしてもしかたないと思った	.01	-.25	.16	.54	-.03	.04
18 死は誰にでも訪れ、悪いものではないと考えた	.07	.20	-.07	.49	-.05	-.26
因子V 感情表出 ($\alpha=.78$)						
33 人に自分の気持ちを話して落ち着こうとした	-.04	-.08	-.06	.03	.94	.06
3 誰かに自分の気持ちを話した	.09	.00	.01	-.01	.75	-.04
13 友人と死について話した	.03	.13	.01	.05	.61	-.24
23 親にその不安を話した	-.03	.15	.11	-.04	.39	.22
因子VI 回避 ($\alpha=.72$)						
25 ひたすら忘れようとした	.08	.11	-.10	.02	-.07	.78
5 死について考えないようにした	.10	-.18	-.13	.10	-.08	.76
15 死の不安のきっかけとなったものを避けるようにした	.03	.13	.13	.01	.11	.52
因子負荷量の二乗和	3.59	3.65	3.60	2.14	3.60	2.46
寄与率(%)	20.89	10.38	7.73	7.12	5.15	3.55
累積寄与率(%)	20.89	31.62	39.35	46.47	51.62	55.17
因子間相関	1.00	.20	.33	.18	.23	.00
		1.00	.15	.04	.51	.21
			1.00	.13	.35	.31
				1.00	-.05	-.04
					1.00	.38
						1.00

3. 各尺度における性差の検討

性差を検討したところ、ネガティブな反すう尺度、死の不安尺度、死の不安への対処尺度のいずれにおいても有意な性差はみられなかった。

4. 各尺度間の相関

各尺度間の関係性を検討するために、相関分析を行った (Table3)。その結果、有意な正の相関を示したのは「ネガティブな反すう傾向」と「熟考」、「充実」「熟考」「身体管理」「感情表出」「感情表出」「回避」と「死の不安」であった。有意な負の相関を示したのは、「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」と「充実」「身体管理」であった。また、各尺度の因子間にも相関が多く認められた。

Table3 尺度間相関行列

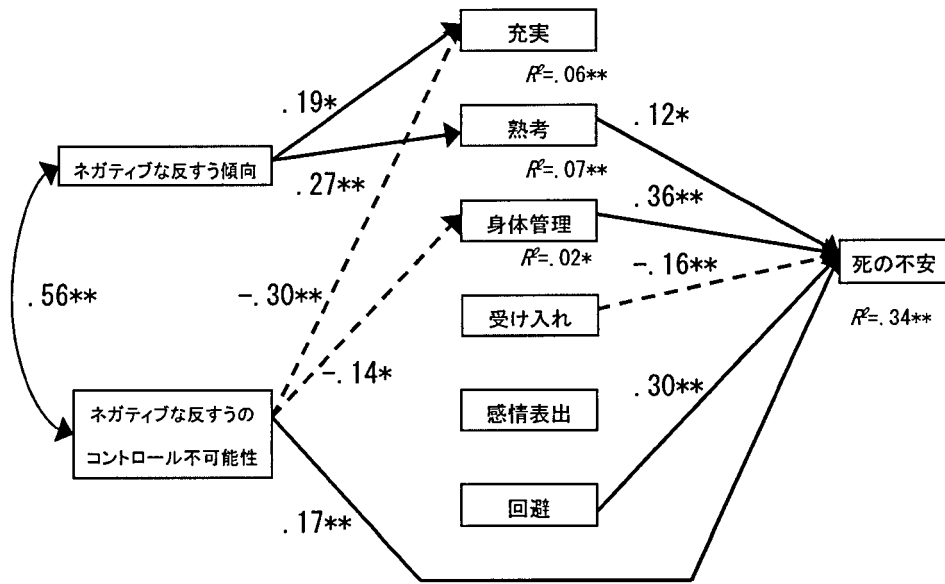
	ネガティブな反すう傾向	ネガティブな反すうのコントロール不可能性	充実	熟考	身体管理	受け入れ	感情表出	回避	死の不安
ネガティブな反すう傾向	1.00	.56**	.02	.27 **	-.03	.07	.10	.06	.12
ネガティブな反すうのコントロール不可能性		1.00	-.19 **	.07	-.14 *	-.07	-.02	.03	.15 *
充実			1.00	.19 **	.38 **	.13	.27 **	.14 *	.16 *
熟考				1.00	.14 *	.03	.48 **	.23 **	.25 **
身体管理					1.00	.14 *	.30 **	.20 **	.39 **
受け入れ						1.00	.00	.05	-.11
感情表出							1.00	.28 **	.19 *
回避								1.00	.40 **
死の不安									1.00

** $p < .01$ * $p < .05$

5. ネガティブな反すうが死の不安とその対処に与える影響

ネガティブな反すうが死の不安への対処、特に熟考するような対処へとつながり、その結果死の不安が高まる、という仮説を検討するために、変数を3水準に分け、パス解析を行った。第1水準はネガティブな反すう尺度の「ネガティブな反すう傾向」「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の2因子、第2水準は死の不安への対処尺度の「充実」「熟考」「身体管理」「受け入れ」「感情表出」「回避」の6因子、第3水準は「死の不安」であった。なお、ネガティブな反すう傾向」と「ネガティブな反すう傾向のコントロール不可能性」において高い正の相関関係が認められたので ($r = .56, p < .01$)、多重共線性について検討したところ、多重共線性は認められなかった。

その結果、「ネガティブな反すう傾向」から「充実」「熟考」へ、「熟考」「身体管理」「回避」「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」から「死の不安」へそれぞれ正のパスが認められた。そして、「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」から「充実」「身体管理」へ、「受け入れ」から「死の不安」へそれぞれ負のパスが認められた (Figure1)。



** $p < .01$ * $p < .05$

Figure1. ネガティブな反すうが死の不安とその対処に与える影響

考察

本研究の目的は、青年が死の不安を抱く頻度を把握するとともに死の不安への対処尺度を作成し、ネガティブな反すうが死の不安への対処、なかでも特に熟考するような対処と、死の不安にどのような影響を及ぼすか検討することであった。

まず、「ネガティブな反すう尺度」「死の不安尺度」「死の不安への対処尺度」について性差を検したところ、いずれの尺度においても性差は見られなかった。河野（2000）は、死の不安の程度に性差が認められない理由として、昔に比べて、男性が恐怖や不安を表明することへの抵抗が少なくなってきたという時代・文化的背景を指摘している。よって、このような時代・文化的背景がネガティブな反すうや死の不安への対処へも影響しており、女性も男性も同じようにネガティブなことを長い間繰り返し考え、死の不安へ対処し、死の不安を抱いているという可能性が考えられる。

次にパス解析の結果から、ネガティブな反すう傾向は、死について情報を得たり自分なりに考えて解釈しようとしたりする熟考対処を促進し、そして熟考対処は死の不安を促進することが明らかになった。これは「ネガティブな反すうが死について熟考するような対処へとつながり、結果として死への不安が高まる」という仮説を支持する結果である。ネガティブな反すうをしやすいということは、ネガティブな事柄と捉えられる死について熟考しやすいと考えられる。熟考対処に類似した対処方略に関する先行研究においては、牧野・山田（2001）が、ストレスナーになりうる物事に取り組むときに、「情報収集による計画立案」の対処を行う量が多い人は、ストレス反応の「抑うつ・不安」「無気力」が高いと指摘している。したがって、熟考対処は死に真正面から取り組み、自分な

りの答えを見つけようとする建設的な対処と捉えることができるが、その反面、死について考えている時間も多くなるために死の否定的な側面に注目することも多く、死の不安の高まりにつながると考えられる。

また、ネガティブな反すうのコントロール不可能性は、直接的に死の不安を促進することが明らかになった。ネガティブな事柄を考えることから逃れられないということは、人間にとって普遍的なテーマである死からも逃れることができず、死の否定的な側面に注目することで死の不安を高めると考えられる。

次に、ネガティブな反すうのコントロール不可能性は、健康に気をつけたり事故にあわないようにして命を大事にするという身体管理対処を抑制し、また、身体管理対処は死の不安を促進することが明らかになった。この結果は、ある対象に対する感情は、そのことを長く考えれば考えるほど強まっていくことを指す極化減少(Tesser, 1978)で説明できると考えられる。つまり、死から逃れようと食生活に気をつけたり事故にあわないようにすればするほど、病気になったり事故にあうことまで考えることとなり、死の不安が高まるのではないだろうか。以上のことから、身体管理対処は死の不安に正の影響を持つが、ネガティブな反すうのコントロール不可能性は身体管理対処に負の影響をもち、間接的に死の不安に影響を及ぼす重要な要因であると言える。

また、死を誰にでも訪れる普遍的なものとして受け入れようとしている受け入れ対処は、死の不安を抑制することが明らかになった。金児(1990)は、死を学ぶ機会を多くもつことによって、死にまつわる迷信などが払拭され、死の恐れが低くなっていく可能性を指摘している。過度に死を否定的なものとして捉えない姿勢は、死への不安・恐怖を低減させると考えられる。

さらに、死について考えないようにし、死の不安を避けようとする回避対処は、死の不安を促進することが明らかになった。特定の思考や感情、欲求などを心から追い出そうと試みると、かえってそれに関連する思考が頭に浮かびやすくなる現象を抑制の逆説的効果というが(木村, 2005)、死について考えることを回避しても、抑制の逆説的効果によって更に死の否定的側面を考える機会が生まれたり、死の不安が次第に増大したりする可能性が考えられる。

以上のことから、ネガティブな反すうが死の不安への対処を媒介にして間接的に、もしくは直接的に死の不安に影響を及ぼすことが示唆された。よって、過度に死の不安を抱き、苦痛を感じている者に対しては、ネガティブな反すうという視点から熟考対処に介入し、または、死の不安から回避せず、受け入れを促すような介入を行うことが有益である可能性が考えられる。

引用文献

- 藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ: テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155.
- 一色康子・河野政子 (2000). 看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究—調査項目の所属間の比較による分析— 看護学総合研究, 2(1), 57-61.
- 伊藤拓・上里一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, 34, 31-42.

- 伊藤拓・上里一郎 (2002). 完全主義およびネガティブな反すう傾向とうつ状態の関連性—抑うつの脆弱要因としての完全主義についての再検討— *カウンセリング研究*, **35**, 185-197.
- 金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 *人文研究 大阪市立大学文学部紀要*, **46**(10), 1-28.
- 木村晴 (2005). 抑制スタイルが抑制の逆説的効果の生起に及ぼす影響 *教育心理学研究*, **53**, 230-240.
- 河野由美 (2000). 大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究 *飯田女子短期大学紀要*, **17**, 73-87.
- 牧野由美子・山田幸恵 (2001). セルフ・エフィカシーとストレスコーピングおよびストレス反応の関連性の検討 *児童学研究*, **3**, 11-19.
- 松田信樹 (1996). 青年の死の不安を規定する要因についての検討—性差, 死別経験, 時間的展望の観点から— *人間科学研究*, **4**(1), 57-65.
- 中野良信 (1999). 口腔心身症に対する読書療法 *日本歯科心身医学会*, **14**(2), 85-89.
- 岡村達也 (1983). 「死に対する態度」の研究—青年と成人との比較 *東京大学教育学部紀要*, **23**, 331-343.
- Rasmussen, C.A., & Brems, C. (1996). The Relationship of Death Anxiety With Age and Psychosocial Maturity *The Journal of Psychology*, **130**(2), 141-144.
- Siscoe, K., Reimber, W., Yanovsky, A., Thomas-Dobson, S., Templer, D.A. (1992). Death Depression versus Death Anxiety: Exploration of Different Correlates. *Psychological Reports*, **71**, 1191-1194.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討, *心理学研究*, **70**(4), 327-332.
- 丹下智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 *発達心理学研究*, **15**(1), 65-76.
- 丹下庄一・坂口綿子 (1987). 死の不安についての一考察 *大阪市立大学生活科学部紀要*, **35**, 299-308.
- Templer, D.I. (1970). The Construction and Validation of Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology*, **82**, 165-177.
- Tesser, A. (1978). Self-generated attitude change. *Advances in Experimental Social Psychology*, **11**, 289-338.

謝辞

本研究の調査は、筑波大学大学院人間総合科学研究科の福森崇貴さん、田中千枝さん、李貞美さんの助言、ご指導、ご協力のもとに実施することができました。心より感謝し、お礼を申し上げます。